あゆみ通信

VOL. 182
あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会)
会　長　細川　克彦
広　報　本持　喜康

すべての人の依り処「正信偈」

私たち真宗門徒にとって、「正信偈」は仏前のお勤めを通して生活の一部になっています。「正信偈」と言うのは、750年前、親鸞聖人が私たちに残してくださった、人間が生きる基準の言葉であり、文章であり、また「偈」なのです。およそ人間が人生を生きようとする限り、「どう生きるか」と言う生きる基準、生き方の依り処を求めない人はいないでしょう。その時、その場を行き当たりばったりの、その場限りの気紛れで生きているものでない限り、どんな無宗教者、無神論者でも、生き方の基準、依り処は心の底で求めているはずです。それにぴったり答えているのが「正信偈」です。ですから「正信偈は、ただ真宗門徒と言った狭い枠の中の話ではないと私は思っています。すべての人の生きる基本要件が語られてあるんだと思います。

そう言う「正信偈」を500年前に、私たちの日常の暮らしで繰り返し称え続けることで生活の端々にまで練り込み、定着させたのが本願寺8代蓮如上人だったのです。お勤めと言う勤行形式を制定して、朝夕これを読み読み称えて、生活の一部にまで溶け込めさせてくださった。それから今日まで、真宗門徒はお勤めで「正信偈」を親代々身に刻み込んできました。(亀井鑛「日暮し正信偈」東本願寺出版より)

朋友会との合同研修会 案内

あゆみの会では、第2組の次世代を担う青年僧組織の「朋友会と連携して、共に仏法を学び、第2組やお手次の寺院の興隆を目指して合同の研修会を開催しています。住職方と併せて、会員の皆さんのご参加をお願いします。

日時　**6月25日（火）13：30**
会場　佛足寺(天王寺区北河堀町)
内容　法話と座談会
講師　清水拓先生(佛足寺住職)
別途出欠確認のご案内します

2組聞法会7月

日時　7月16日(火) 14：00
会場　唯専寺(浪速区敷津西)
内容「初めての正信偈」
講師　宮部渡先生
（15組　西稱寺住職）
教材「初めての正信偈」をご持参ください。初めての方には受付でお渡しします。
参加費　500円

聞法会スタート

第2組では従来から共同教化事業として、①同朋大会②聞法会③合同報恩講に力を入れてぃます。毎年、年数回の教化委員会を開催し、それぞれの内容について、忌憚のなく意見交換をしながら、企画し検討して実施してきました。

その教化委員会は、組内の

親鸞のことば

念仏を称えること、それがすべて

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに　　「歎異抄」

親鸞の師法然は、念仏とその他の行を比較し、念仏は行しやすく、あらゆる徳がつまっているから最も勝れていると説いて「ただ念仏して阿弥陀さまに救われなさい」と念仏を広めました。親鸞もこの教えを受け継ぎました。しかし、親鸞と法然の教えに違いはありません。浄土真宗をひらいたのは法然だと、親鸞は語っています。ただ、法然には他の行ではなく念仏を広めるという課題、親鸞には法然の広めた念仏を信心の側面から説くと言う課題があったと言えます。

。（名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より）

「今」を生きる

現在、83歳。残りの人生が見えてきた。

仏法の教えに触れて、今、この年、この月、この日、この時間は二度と来ないから、無駄にしないで大切に、お念仏の中の生活を生きていこうと考えるが、思うように生き切れていない。

このことを宗祖親鸞聖人は「凡夫」と言われる。

「凡夫というは、無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり」(一念多念文意)

敬愛する東井義雄先生は**「明日がある/明後日があると思っている間は/なんにもありはしない/肝心の「今」さえないんだから」**と。

あらためて、「ただ、念仏」をかみしめている。合掌。（本）

新田修巳先生

住職や坊守、そして寺族の役員と、門徒会や組推協「あゆみの会」の役員で構成されています。

第２組では親鸞聖人のみ教えが示された「正信偈」の聞法に力を入れ、これまで長年にわたり新田修巳先生(平野区正業寺）に「共に学ぶ正信偈」と位置付けて聞法を重ねてきました・

そして今年からご縁の出来た若手のご住職、①大橋恵真先生(18組遠慶寺)、②宮部渡先生(15組西稱寺)、③廣瀬俊先生(17組法觀寺）を講師に、「初めての正信念仏偈」をテキストに使って開催しました。

第1回は2024年4月22日(月）午後2時から、天王寺区の紹隆寺(喜左上恵子住職）を会場に、組内の住職や坊守、そして門徒や推進員そして紹隆寺のご門徒さんも参加して26名で開催されました。

講師は大橋恵真先生で、先生は冒頭、①「正信偈」とはどういうものか、②「正信偈」の制作の理由は、③その構成はどうなっているのかについて丁寧に話されました。

休憩後は、「偈前の文」について語句の意味とその解釈を話された後、本文の**「帰命無量寿如来　南無不可思議光」**について、同様に語句の意味を説明され、参考として善導大師の**「帰去来、魔境にはとどまるべからず。曠劫よりこのかた六道を流転して、尽くみな径たり。いたるところに余の楽無し、ただ愁嘆の声を聞く」**を紹介されました。

(法話要旨は、別項で）

如是我聞
大橋先生の法話聞書
佛足寺細川克彦

「正信偈」は正しくは「正信念仏偈」と言われ、親鸞聖人の著作『教行信証』全6巻中、第2巻の「行巻」の最後に書かれてあり、親鸞聖人の自覚内容を述べられていると。

その制作の理由は「知恩報徳」(恩を知りて、その徳に報いる）のために、全く私心をを交えることなく、「救われた」と言う感動を讃歌にして歌い上げられたものであると。

次にその構成について、江戸時代の学者によって、依経段(えきょうだん)と依釈段(えしゃくだん)の2部に分けられ、依経段は本願の教え、すなわち「南無阿弥陀仏」の教えが説かれた「仏説無量寿経」について書かれていると。一方、依釈段(えしゃくだん)と言うのは、「南無阿弥陀仏」で救われた七高僧、龍樹菩薩・天親菩薩(印度）、曇鸞大師・道綽禅師・善導大師(中国）、源信僧都・源空(法然）上人(日本）と言う方々について述べられていると。

休憩後、「偈前の文」について、釈尊のまことのお言葉(南無阿弥陀仏の教え）に帰し、七高僧の解釈をよくいただいて、阿弥陀さまの御恩の深く尊いことを信心の智慧によって、深く知らせていただき、「正信念仏偈」を作られたと現代語訳されました。

そして、まず「帰命無量寿如来」のところでは、親鸞聖人は「帰命は本願招喚の勅命勅命なり」といただかれ。仏さまの方から命令してくださっていると。帰命とは頭が下がったと言うことであると。

「無量寿」と言うことについて、量ることの出来ない寿(いのち)をたたえた仏さまと言う意味であるが、延塚知道先生(大谷大学名誉教授）の解釈を紹介され、寿を量らない仏さまとして、いのちを量ってばかりいる私たちに、「本当のいのちの世界に帰れ」と呼びかけておられるのだと。

そして、私たちに起こってくる不安や悲しみや空しさは仏さまからの促し、「そういう生き方でいいのですか」と言う呼びかけであると。

また「南無不可思議光」について、光そのものは見えない、何かにあたって反射して、光のあることが分かると。私たちは、私たちの煩悩に光が当たって、煩悩と自覚させてくださる光が、量りなく嬉しいと。念仏の人は、自分の煩悩と向き合っておられて、はじめて光と自覚されると話されました。

お知らせ　大阪教区主催
第17回同朋大会

テーマ：私たちは何を求めて生きているのだろうか

日時　**6月15日（土）10：00**
会場　難波別院　本堂
講師　藤井慈等先生
（三重県松坂市慶法寺前住職）
参加費　1000円
ご注意　参加受付は終わっています。

大推協公開講座
大阪教区同朋の会連絡協議会

（略称：大推協・会長細川克彦）では聞法活動として公開講座が次の通り開催されます。皆さまのご参加をお待ちしています。

日時　**6月11日（火）14：00**
会場　難波別院同朋会館講堂
（地下鉄御堂筋線本町駅下車、⑬番出口より南へ）
講題「生死出べき道」としての浄土真宗
講師　加来雄之先生
（親鸞仏教センター主任研究員）
参加費　無料